

大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

陸上生活への適応と地方変異

貝類というと水中の生物と思われませんが実は陸上に進出して生活するようになった貝類もいます。身近にいるカタツムリやナメクジなどはこれに該当します。陸上生活をする貝類はたくさんの種類がいて、国内では約 800 種にも上ります。金生山化石館ではこうした陸産の貝類（陸貝）について紹介しようと「山にも貝がいた！」と題した企画展を計画しました。

昆虫類に次いで多くの種が存在する貝類は多くの生物の中でもっとも繁栄している生物グループの一つです。水中で生活する貝類が陸上に進出していくためには、乾燥への対応や呼吸の問題など、立ちのぼる大きな壁を乗り越えなければなりません。ですから、貝類の中で陸上進出に成功したのは、腹足類（巻貝）のごく一部のグループに限られています。

乾燥への対応には軟体部分を覆う粘液が役立ちました。ナメクジのヌメヌメした強力な粘液は石灰質の殻がなくても乾燥から身を守ることができます。ナメクジ以外の殻をもつ多くの陸貝たちは、殻の中に全身を引き込み、更に殻の入り口を蓋でふさいだり粘液から作られるエピフラムという膜で覆ったりすることで乾燥に耐えています。

空気中での呼吸については、肺呼吸ができるように肺を進化させたグループが出現しました。こうしたグループを「有肺類」といいますが、陸貝の多くはこの肺呼吸をする貝たちで、その中でもマイマイ類（カタツムリ）のように長い触角の先に眼を持つ「柄眼類」が中心となっています。細長い殻をもつキセルガイ類も柄眼類の仲間です。

陸貝の仲間は、乾燥化や呼吸への対応から「蓋をもつ陸貝」と「肺呼吸をする陸貝」の二つに大きく分けられます。そして、蓋をもつ陸貝は、「石灰質の蓋をもつ陸貝」と、「角質の蓋をもつ陸貝」の2グループに分かれます。ですから、陸貝には大きく分けて3つのグループがあるということになります。



ヤマキサゴ（アマオブネガイ類）



ヤマタニシ（新生腹足類）



コガネマイマイ（有肺類：柄眼類）

移動能力に乏しい陸貝類は、地域ごとに独自の進化・分化を遂げ、地域によって少しずつ形体の異なる地方変異が生じました、そして更に固有種といわれる地域性の高い種が出現したのです。固有種は、世界といった広い視野でとらえるならば、日本の生物の多くが日本固有の生物となりますが、もっと狭い伊吹山系とか、東海地方、更には金生山のように限られた区域の固有種も存在します。陸貝類には固有種が多いということも大きな特色の一つです。



ミノマイマイ

伊吹山系の固有種には、ミカドギセル、シリボソギセル、ヒルゲンドルフマイマイ、ヤコビマイマイ、イブキクロイワマイマイなどがあります。金生山には、シリボソギセルの亜種でオルサトギセルという金生山だけに生息する陸貝があります。ヒルゲンドルフマイマイの亜種でアメイロヒルゲンドルフマイマイも金生山だけに生息する陸貝です。金生山にはもう一種クロダアツクテムシオイガイという小さな陸貝も生息しており、これも金生山以外では生息が確認されていません。

イブキクロイワマイマイは白山山系に生息する大型の陸貝であるクロイワマイマイの亜種とされています。イブキクロイワマイマイは、伊吹山系や鈴鹿山系の一部に分布しますが、クロイワマイマイと比較すると少し小型化しています。そして平地に移行するとミノマイマイやチビクロイワマイマイに変化していきます。金生山で最も大きな陸貝はミノマイマイですが、「美濃」という名をもつこの陸貝は最近生息数が減少してきており、山中で見かけることは稀になりました。イブキクロイワマイマイは、金生山で採集したという記録はあるのですが定かではありません。また、ヤコビマイマイも採集の記録はありますが現在では確認することができません。



クロダアツクテムシオイガイ



お知らせ



後期企画展

「山にも貝がいた！ —金生山の陸産貝類—」

金生山の山頂にある明星輪寺境内は、陸貝の生息地として岐阜県の天然記念物に指定されています。金生山では50種を超える陸貝の生息が確認されていますが、この中には固有種と呼ばれるこの地域独特の種や、絶滅の危機に瀕している種も含まれています。

企画展では、金生山の陸貝以外にも、珍しい形や色彩の貝、大きな貝や小さな貝など様々な陸貝を展示して、陸貝について興味深く解説します。

期 間 10月8日(土)から1月30日(月)

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp